

## 続・歴史のトラウマと和解修復の試み： 「南京を思い起こす 2011」の報告と課題

村本邦子  
立命館大学

### 1. はじめに

臨床心理士として、虐待、性暴力、DV など、女性と子どもへの暴力のトラウマに関わるようになって、二十数年が経つ。並行して予防活動にも取り組んできたが、これらの仕事の延長線上に、コミュニティのトラウマ、歴史のトラウマというテーマがあった。私の戦争に対する関心は、パーソナルな問題意識に由来するものだが、本当のところ、それが私の仕事に影響を与え続けてきたことは間違いない。

経過の詳細は過去の論文を参照頂くとして（村本、2004、2008、2009、2010）、村川治彦氏を通じて、2007年7月、アルマンド・ボルカス（Armand Volkas）氏、および HWH（Healing the Wounds of History; 歴史のトラウマを癒す）と出会い、2007年11月、南京にて開催された「南京大虐殺 70 周年国際会議」に参加した。そこで、南京師範大学の張連紅先生や学生たちと出会い、南京大虐殺をテーマにした中日ワークショップを試行してきた。2009年10月に「南京を思い起こす 2009」を、2011年10月に「南京を思い起こす 2011」を実施し、本著は 2011 年分の報告書である。

今回は、日本の文部科学省「科学研究費基盤（B）：日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発」の助成金を得てのセミナー開催であり、ファシリテーターとしてアルマンド・ボルカス氏、サポート兼通訳としてエディ・ユー氏と笠井綾氏を加え、中国のプレイバック・フレンズと日本のプレイバックーズの協力も得て、より発展的なプログラムを提供することができた。また、村川治彦氏（身体教育学）、金丸裕一氏（日中関係史）、小田博志氏（文化人類学）にも参加して頂き、学際的な視野の拡がりを持たせ

ることができた。日本政府の助成によって本セミナーが実施されたことにはさ  
さやかながら意味があると思われる。詳細なデータ分析は今後の作業となるが、  
本稿では、今回のセミナーを振り返り、その概要と現時点での考察を報告した  
い。

## 2. 絆の深まりと「和解のステップ」の進行

HWH には、①タブーや沈黙を破る ②お互いを集団としてではなく、一人  
一人が独自の物語と顔を持つ人間として見る ③自分の中の加害者になる可能  
性に気づく ④深い悲哀の体験 ⑤パフォーマンス、儀式、追悼などの統合・  
表現と共同作業 ⑥社会的奉仕や創造的活動への変換という「和解への6つの  
ステップ」があり、ボルカス氏（2009）によれば、HWH を継続的に実施して  
いくことで、たとえ参加者が入れ替っていったとしても、そのステップは進行  
していくのだという。今回、HWH を用いたワークショップとしては2回目の  
実施であったが、2007年の国際会議から数えると3回目の参加となるメンバ  
ーが、主催の中核メンバーを含め中国側にも日本側にも複数あり、継続的な取  
組みへの信頼や国境を越えた個と個の出会いによる絆の深まりを実感するこ  
うができた。

2009年のセミナーで明らかになったことだが、このようなワークショップに  
参加すること自体が、「タブーや沈黙を破る」意味を持つ。中国人であれ日本人  
であれ、このセミナーへの参加を決意した時点で、最初の一步を踏み出したこ  
とになるが、このステップにも行きつ戻りつプロセスがある。また、中国人  
と日本人とでは、そのステップの踏み方に違いがあった。同様に、このよう  
なワークショップに参加することが、おのずと「お互いを集団としてではなく、  
一人一人が独自の物語と顔を持つ人間として見る」プロセスを促進する。中  
国人にとっては、このようなセミナーに参加し、過去に向き合おうとしている日  
本人がいるという事実が、日本人を集団としてひとくくりにはできないもので  
あるという認識につながるし、日本人にとっては、罪悪感や恐怖心を抱えなが  
らも訪れた南京で、中国人に暖かく受け入れてもらえるということがまず大きな  
意味をもたらす。そして、当然ながら、顔の見える関係のなかで個別の物語を  
分かち合うことこそが、このステップを深める。今回は、中国側にも香港や海

外に暮らすなど多様な背景を持つ人々が含まれ、日本側にも在日外国人が含まれており、中国対日本という二項対立で捉えきれないことを参加者は実感することになった。

ところが、「自分の中の加害者性」については、ステップの進行を要求するように思われる。南京大虐殺をめぐる中国対日本という構造のなかでは、いったん、被害者対加害者という構造ができるため、最初の段階では、被害者・加害者のアイデンティティが固定しやすい。日本人側、とくに男性は加害者と同一化しやすく、それだけに抵抗も表れる。日本人女性に見られた「自分の中の加害者性」は、自身のなかに取り込まれていた「右翼的な声」に気づくところから始まっていた。2011年の今回、中国人男性との分かち合いのなかで印象に残ったエピソードがふたつある。ひとつは、アメリカに留学した友人たちが志願してイラク・アフガン戦争に行っているという話。「戦場では、銃を撃たなければ、撃たれる。自分だってそこにいれば同じことをするだろう」と彼はシニカルに言い放った。もうひとつは、「もう泣かないでください。誰でも状況によって悪いことをしてしまいます。日本人だけではありません。私だってそうだと思います」という慰めの言葉である。どちらも、人間は極限状態に置かれると、誰でも残虐な加害者になる可能性を持っているのだということを認めた言葉である。そこから共にどこへ進んで行けるのかが大きな課題となろう。個人的には「だから仕方がなかった」ではなく、「だからこそ、自分たちを極限状態に追い込むようなことをすべきではないのだ」と思う。

「深い悲哀の体験」には、南京大虐殺について、感情レベルでの理解の深度が不可欠であるが、参加者が抱える個人的エピソード、とくに幸存者の話を聴くことで、その深度は増し、象徴的な追悼式でピークを迎えるように思われる。「深い悲哀」には、被害者に起こってしまったことへの悲哀、このような残虐な加害を起してしまったことへの悲哀、人類のなかにある残虐性や悪を見てしまった悲哀など、いくらかの次元がある。絆の深まりとアートを用いたプロによる先導によって、加害者側と被害者側の子孫は、今回は前回よりもう一歩近づいて、心を開き、礼儀や遠慮を越えて本音を分かち合うという難しい課題に挑戦することができた。表に見え、聞こえる中国人の声、日本人の声の裏側に、それぞれ傷ついた子どもの声が隠れている。これを、ボルカス氏は、「中国の椅

子、日本の椅子」という舞台設定を用い、時にダブルリング（セラピストが声を補強すること）によって、表現を促していった。加害者側と被害者側の子孫たちの悼みや哀しみが身体レベルで痛く感じられたように思う。この椅子には、日本人が中国の側に、中国人が日本の側に座ることも可能であるため、相手方の立場に立って、自分自身の立ち位置を相対化することを促進した。

「パフォーマンス、儀式、追悼などの統合・表現と共同作業」は、プログラム最後の統合の部分で促進され、「社会的奉仕や創造的活動への変換」というステップは、未来への決意表明で表される。通訳や翻訳作業など、このプロジェクトに積極的に協力しようとしてくれることに始まり、今後、時間経過を経て、参加者たちの中から平和の活動へのコミットメントが報告されることを期待している。

### 3. 表現を助けるアートの力

HWHの大きな特徴のひとつは、ドラマセラピー／表現アートセラピーの手法を取り入れていることにある。ボルカス氏は、ドラマセラピーには遊びの要素が入っており、遊びは異文化間闘争の和解の中で多くの機能を持つとしている。戦争という深刻なテーマのなかに遊び心を取り入れることで、受け継いできた集団トラウマへの解毒剤になると同時に、参加者の「子ども」の自我状態を引き出し、「親役割を取らされてきた子ども（parentified child）」が部分的に開放され、失った純真さを取り戻すことを助ける。また、トラウマ的なイメージや、記憶、受け継いだメッセージから芸術や社会活動を生み出すことは、トラウマを克服するもっとも強力な方法であるという（Volkas, 2010）。

ドラマセラピー／表現アートセラピーの手法の有効性については、前回のセミナー時から、多くの参加者が言及してきた。歴史のトラウマは意識や言語を越え、身体レベルで刻まれているために、知的レベルで解消することには限界がある。ドラマやアートを通じて、身体や作品の形で表現され、共有されることで昇華が促進されること、自分の身体を通じて体験することで、歴史のトラウマを抽象的な一般論としてではなく、きわめてパーソナルなものとして理解することができるようになること、身体を動かしてエネルギーを発散することで、歴史のトラウマによる二次受傷を避けることができることなどが指摘できるだ

ろう。

とくに、今回は、二度にわたって「中国の椅子、日本の椅子」が取り入れられたが、二つの椅子を対峙的に置くこと、椅子の表（社会的な顔や表面的な声）と裏（傷つきやすい子どもの声）を使い分けることで、それぞれの立場の違いを明確化し、双方に同時に存在する多様な声を表現することが可能となった。このような舞台設定は、パーソナルな声としてではなく、集合同的な声を多声的に安全に表現させる装置となる。

今回のセミナーにはプレイバックシアターが取り入れられた。プレイバックーズとの出会いについてはすでに紹介したが（村本、2009）、コンダクター（司会進行役）に導かれる形で、参加者の1人がテラー（物語る人）として自分の体験を紹介したものを、アクター（役者）たちが即興で演じ、参加者全員で共有するという構造になっている。中国のプレイバック・フレンズと日本のプレイバックーズの協力を得て、プレイバックーたちにも4日間のセミナーに参加してもらうことができたので、セミナーのなかにもプレイバックシアターの手法が取り入れられた。今回は40人という大グループのワークショップとなったが、遊び心たっぷりのプレイバックーたちの存在に助けられ、参加者の表現の幅も広がった。

3日目の夜には、プレイバックシアターが公開された。HWHの最後のステップは、「社会的奉仕や創造的活動への変換」であるが、少人数でインテンシブなワークショップ参加者が、コミュニティの感情的リーダーとなり、儀式やパフォーマンスという形でパブリックイベントを行うことで、その波及効果を社会へ拡げていこうとするものである。あらためてアートは社会変革のためのパワフルなツールであることを実感した。参加者の多くは知らないが、今回、中日のプレイバックーたちの初めての共演ということで、ボルカス氏の指揮下、1日のワークショップを終えた後、毎夜、熱心にリハーサルを繰り返していた姿が忘れられない。国境を越えたプロの協働作業に支えられて今回のセミナーが成り立ったことは大きな感動であったことを付け加えておきたい。

#### 4. 遠ざかる戦争と現在の戦争

3日目の晩に公開された「南京を思い起こす 2011：日中共同プレイバック公

演」では、フロアから4つの物語がシェアされ、演じられたが、結果的に、どれも三世である若者世代の物語となり、南京大虐殺そのものを扱った物語はなかった。HWHのワークショップ全体の流れから言えば、それまですでに、一世の物語や二世の物語が扱われ、三日間のプロセスを経て、ようやく今回のワークショップの主役である三世たちが主人公となる物語が表出されたとも考えられる。そこに表れたのは、過去の被害・加害国という関係を越えて、愛し合う恋人たち、留学や経済交流などの形で、すでに両国には切っても切れない関係があり、その狭間で戸惑い、落ち込み、迷いながらも、手をのぼし、つないでいこうと決意する若者たちの姿である。「時代は変わった。世代交代だ」と胸を打たれた一方で、これから先、南京の記憶を私たちがどのように受け継いでいけるのか、あらためて考え込むことになった。

ワークショップの初日、「戦争の話を直接聞いたことがある人」と問うたソシオサークルで、「ない」とした参加者たちが意外に多くあった。日本人の若者にはしばしば見られることだったが、今回、中国人の若者の中にもあったことが印象的であった。前回の参加者は南京周辺で生まれ育った、もしくは大学生として南京に暮らしている若者たちだったが、今回は遠方から来たさまざまなバックグラウンドを持つ中国人が含まれていたことから、「南京大虐殺についてあまりよく知らない」という人もいた。追悼式の場で偶然出会い話した中国人の若者も「ほとんど知らない」と言っていた。彼は、来年、日本に留学するのだと言い、私たちとしばらく会話した後、「次は中国人グループで追悼します」との声に反射的に反応して、中国人グループに飛び入りで加わっていた。

2007、2009、2011年と、これまで3回にわたる南京セミナーで、私たちは幸存者の話を直接聴く機会に恵まれた。想像を絶する苛酷な体験を生き延びたまさに奇跡とも言える存在が目の前にあって、その存在を体感することは、虐殺記念館や書物で学ぶことで代用できないパワフルな力を持っている。しかも、日本人に語ることをよしとする幸存者であることから、その寛容さによって、参加者たちは、勇気をもって闇を覗こうとすることへ優しく導かれてきた。しかし、その蔭には、決して日本人に会いたくなどないと思う数えきれない幸存者たちがたくさんいるはずで、哀しいことに、幸存者の数は年々減っていく。私たちのこのセミナーが幸存者の力に支えられてきたことを思えば、五年、十

年、二十年と続けていくことのできる平和のためのセミナーはどのような形のものだろう。

他方で、上述したように、参加者の友人がイラク・アフガン戦争に行っているという話はショッキングだった。たしかに、世界に眼を向ければ、あちこちで紛争や戦争が続いている。それは、多くの若者たちが戦場に駆り出されていることを意味するが（実際には幼い子どもたちさえ戦場に駆り出されていることを知っているのに）、どこかでそれを遠い出来事のように感じていた。少なくとも、日本の留学生で、アメリカ軍に志願して戦場に行ったという学生の話は聞いたことがない。たんに想像力の欠如と言うべきなのかもしれないが、三回にわたるセミナーでの交流を通じて、参加者である中国の若者たちを今や愛おしく感じている自分にとって、「自分も戦場にあれば銃を撃つ」という若者の言葉に、戦場で銃をもつ息子の姿を思い浮かべた時のような衝撃を受けた。

これまでも、「南京だけではないだろう」との批判を受けてきた。まったくそのとおりである。しかしながら、ひとつの人生で扱えることが限られていることを思えば、南京は唯一絶対的なものでありながら、それを超え出る意味を持つことになる。南京の記憶を相対化してしまうことなく、全体性のつながりのなかに置いて見ることは、大きな挑戦と言えるだろう。

## 5. ジェンダーと戦争

今回、もうひとつ強く感じさせられたのは、ジェンダーの問題である。「中国の椅子、日本の椅子」のワークを通じて、あらためて、中国と日本の「男たち」（実際の男というよりは、「男性的なるもの」、あるいは「カテゴリーとしての男」と言うべきだろう）の声を聴くことになった。

たとえば、中国側の声としては、「お前たちは、また、俺たちの国を蹂躪する。その用意ができているということだな。いつでも俺たちを攻める。俺たちは俺たちの国を守る。強くないといけない」「私たちは永遠に過去の歴史を、その痛みを覚えていこうと思っているのです。私たちは近代、日本だけでなく、ほかの国にもいじめられてきた。そういう痛々しい歴史を何回も何回も見直したいと思いませんか？何回も何回も傷つけられたいと思いませんか？」侮辱されていると感じる。中国と日本との経済の立場は最近どんどん狭まっている

が、それにしてもまだだ」。そして、追悼式において、中国グループが皆でこぶしを振り上げて強くなることを誓った姿は、いくら慣習的なものとの説明を受けても、いささかショッキングな場面であった。

実は、2011年8月に蘇州で行われた「国際表現性心理学会」において、笠井綾氏とともに約200名でHWHの体験的ワークショップをおこなった。その時のソシオサークルで、一人の中国人男性が、「なぜ三十万人もの中国人が抵抗もせず殺されたのかと思う人！」と呼びかけ、別の中国人男性が、「我々はもっと強くならなければならないと思う人！」と呼びかけ、たくさんの中国人が輪の中に集まった。言葉はわからずとも、その声に含まれた悔しき、憤り、哀しみや苦渋のエネルギーの大きさに圧倒される思いだった。この時は、学会会長である山中康裕氏が、学会の終わりの挨拶のなかで、「日本は中国に比べて資源にも恵まれない小さな国です。あなたたちは面積においても、人口においても、経済においても、日本に勝っています。あなたたちは、すでに十分に強いのです。もうこれ以上強くなる必要はありません。これからは、優しくなってください」といったメッセージを伝えた。この学会では老賢者的存在である日本人男性の言葉を中国人男性たちがどのように聴いたのかはわからないが、印象に残るエピソードであった。

日本側の声も、とてもよく似ている。椅子の外からは、「お前たち、何やっているんだよ。そんな昔のこと、何謝りに行ってんだよ。そんなの関係ないだろ。俺たちは戦争に負けたけど、アメリカに負けたんだ。中国に負けたんじゃねえよ。俺たちは経済的に成功したし、お前たちは一番になった」。椅子の陰からは、「自分の中に閉じこもっていたい。弱い自分を見せたくなくて、ひたすら鎧を作って隠れている。どんなことも受け入れたくない。現実も見たくない。自分が弱いことがばれて、人から利用されたくない。見下されたくない。本当の自分の弱いところをみられたくない」「もう完全に僕らの生活は中国なしでは成り立たない。メイドインジャパンの製品だって、中国で作ってるのがほとんどだ。食料も中国から輸入のものばかり。生きていけなくなる。中国は、そういうことをきっと知っていて、我々に圧力をかけているんだ。百年したら、日本は中国の植民地かもしれない。怖い」。

これが椅子の表の声としては、こうなる。「あなたたちは、経済上、日本に勝

つことができない。だから、涙を流して、私たち日本の悪いことを言っているのでしょう。あなたたちの手段はとても汚い。今は経済こそ戦場なのです。あなたたちは私たちのテクニックを使っているのです。日本のテクニックを全部利用しているから、あなたたちの経済はこんなに発展しているのです。あなたたちはとても怖がっているから、嘘をついている」「いい加減にしろ。被害者だと言いながら、ガンガン軍備を増強して空母まで造っただろう。火事場にそうやって嘘ついて、南シナ海も全部自分のものにしようとしているし、南沙もそうじゃないか。自分の権益を広げてばかりで、こっちも核持つぞ」。

中国と日本の両側に共通する強さへのこだわりと、その背後に隠れている傷つきやすさに直面して、私自身は、中国対日本という構造とは別に、女性対男性という構造をも実感することになった。このとき、ワークショップ中にプレイバックされた「優しかったおじいちゃんの思い出」の物語が思い浮かんだ。「男たち」は、孫だったり、子どもだったり、妻だったり、親だったりする自分の大切なものを守るために強くなろうとする。裏返せば、相手を打ち負かし、やりこめるためには、相手方の大切なものを傷つけるのがもっとも効果的であるということになる。南京大虐殺は、英語で「レイプ・オブ・ナンキン」と呼ばれる。戦地でのレイプや「従軍慰安婦」問題も、そこから遠くないところにある。女たちが男に保護を求め、強くあることを求めれば求めるほど、男たちは、この強さのシナリオから降りられなくなるのだ。戦争をするのは男だが、背後でしかけるのは女である。思わず、日本側の椅子に駆け寄って、「そんなに強くならなくてもいいから。私たちを守ってくれなくてもいいから。自分たちだけで頑張らなくて大丈夫だから。だから、まずは、犯してしまった過ちを謝りましょう。これからどうしていったらいいのか、一緒に考えましょう」と駆け寄りたい衝動に駆られた。

2007年の国際会議は、男女からなる年配者たちに導かれる形での参加だった。追悼式で自分たちの祖先が中国の人たちにしてしまったことを悔い、謝罪しながら、私の心の一部は、涙を流して謝罪する日本人男性たちの姿に、どこか女性として癒される体験をしていた。自分は臨床心理士として虐待されレイプされた子どもや女性たちの話をたくさん聴いてきたが、こんなにも女性として傷ついてきたのだと改めて思ったものである。2009年のセミナーでは、連

れて行った学生をのぞけば、日本人男性の姿はなかった。日本人グループを率い、仕方がないとは言え、正直なところ残念で寂しかった。そこでは、中国人女性の人間彫刻のなかでレイプされる中国人のロールをやった後、私たちは抱き合って泣いた。日中の壁を越え、女性としてのつながりを感じた瞬間だった。

2000年、東京にて開催された「女性国際戦犯法廷」は、国境を越えて女性たちがつながり、日本軍による「従軍慰安婦」制度を裁いたものである。そして、ここには、「カテゴリーとしての男」と戦おうとする男性たちが参加していた。軍隊システムは、性差別や人種差別などあらゆる差別権力関係を活用することで兵士の暴力性を高め、非人間化する。本当のところ、このセミナーは男性だけでも女性だけでも成り立たないのだと思う。そういう意味で、今回、日本人男性が複数一緒に来てくれたことは、私にとって希望だった。

## 6. 無力感と行動すること

今回、表出したキーワードのひとつに「無力感」がある。とくに、日本側には、右翼や政府に対する無力感が表出され、中国側はそれに苛立ちを感じていた。「やりたいのですが、私のやれることがとても少なくて悔しくて泣いています」「できればいいのですが、でも不可能だと思います。本当に私は日本人を代表して中国人へ謝罪したいのですが、でもこの代表はできないんです」「日本人として本当に情けないです。日本の政府のことを言われると本当に無力を感じます。努力をしていますが、無力です」など、次々と表出される日本側からの無力感に対して、中国側からは、「あなたたちが謝りに来ても、日本という国は変わっていないじゃない。なぜあなたたちは自分の国を変えようとしないのか。私たちに謝りに来るなら、まず自分の国を変えて」「本当に日本を変えることはできないのですか。ここにいらっしゃる先輩方に少し残酷な現実を言いたいです。中国の昔のことわざでは、『父がやった罪は、息子が必ず償わなければならない』のです。あなたたちの祖先がやってきたことを、あなたたちは受け入れないといけません。あなたたちの運命です。あなたたちは自分が祖先が中国でどんなことをやってきたのか、どれくらい残酷なことをしてきたか、人間として絶対できないくらい残酷なことをやってきたことはわかっているんですか？」などの言葉が投げかけられた。

その後、日本側から「日本国内で右翼の声ばかりが目立つようだけれど、日本国内でも昔から一生懸命教育をしている人たちがいる。ただ、そういう人たちも中国が嫌いになってやめてしまう人も多い。どこかで折り合いをつけて、僕たちを応援してくれ。お願いします」の言葉が投げられ、「中国側もみんな自分のことを変えようと思っている方もいる。信じてください」「歴史から逃げ出すのではなく、でも、中国人は気が重く、日本人は謝るという構図がなくなること、重荷を下ろすことができるように願っています。あきらめないでください」とのエールが返された。このセッションは、「今、双方に必要なものは何か」というボルカス氏の方向づけにより、「一緒に、同じところへ歩いていきたい」という中国側の言葉から、握手や熱い抱擁が交わされ、参加者たちは、しばし親密感や絆の感覚に浸って幕を閉じた。

今回のプログラムでは、無力感から一歩進み、参加者たちは自分たちのできる行動から始めようという決意が見られた。とは言え、HWHの最後のステップである「社会的奉仕や創造的活動への変換」にはまだ時間が必要なのかもしれない。

## 7. アイデンティティについて

最後にアイデンティティについて触れておきたい。HWHで必ず用いられるアイデンティティのワークは、他者の前で「私は〇〇です。〇〇人です」と言ってみて、何を感じるかを見ってみるというものである。これを日本や中国でやろうとすると、ほとんどが戸惑い、出身国よりも、出身地を言う。それを受け入れたうえで、出身国を言うように進めると、最終的には何らかの気づきをもたらされるのだが、アイデンティティとは何なのか考えさせられてきた。

導入としてボルカス氏が示した例は、次のようなものだった。「私は、アルマンド・ボルカスです。私はユダヤ人です。私がこれを言うときに思うのは、みなさんがどんなイメージを持つか、ということです。私は、自分の国にいてもターゲットであるように感じることもあります。でも、この国にいるときは、まったく白紙であるように感じます。

私はアルマンド・ボルカスです。私はアメリカ人です。もっと複雑な感じがします。

アメリカが世界でとっている行動について恥に思います。

私はアルマンド・ボルカスです。私はフランス人です。私はフランスで生まれました。フランスの市民権を持っています。私はアメリカのテレビ番組が氾濫していて、完全なフランス人になることはできません。

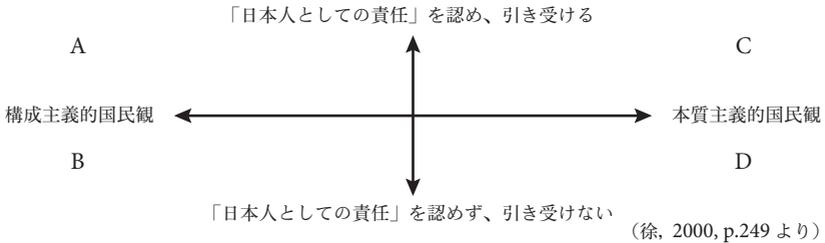
多種多様な背景を持ちながらアメリカに暮らす人々にとって、「私は〇〇人です」というセンテンスは比較的馴染みのあるものであり、それだけに、国や民族としてのアイデンティティは否応なく意識化されてきたのだろう。それに比べ、現実には多種多様な背景を持つ人々を含みながらも、あたかもそれがないかのようにして暮らしている日本人にとって、「私は日本人です」というセンテンスは馴染みのないものであり、戸惑いが先に立つ。「日本人としてのアイデンティティ」は右翼的な物言いに通じることへの恐れから、拒絶的な反応も多い。

ここで、私自身のプロセスを紹介したい。2007年、初めて南京を訪れた時、私自身も、自分と自分の国との関係をどう位置づけたらよいのか戸惑っていた。日本の文化には好きな部分もたくさんあるけれども、日本政府や日本人のあり方には反発や批判があり、ずっと一定の距離を置いて眺めてきたので、突然、日本という国や日本人であることにアイデンティファイすることができないでいた。その限りにおいて、中国人に対して、素直に「ごめんなさい」と言うことができなかった。変化は、虐殺記念館で突然訪れた。女たちの裸体の山の横で晴れやかに笑っている若い日本兵たちの写真を見て、「これが、私たちの父であり、祖父であり、曾祖父である。彼らが、焼け野原となった日本に帰ってきて、戦後の日本を建て直し、そこに私たちは生まれ、育ったのだ」と悟った時、その土壌から出た食べ物を食べ、教育を受け、成長してきた自分は、紛れもなく日本人であると受け入れた瞬間だった。そこから、加害者としての恥と怒りと悲しみを自分の胸の中に入れる通路が開き、日本人として謝罪せざるを得ない気持ちになった。

2009年のセミナー参加によって、初めて日本人としてのアイデンティティを持ったという参加者は、それは「日本人であることに責任をもちたいという感覚」であるとした。「過去に犯した戦争の加害の罪は、過去だけにあるのではない。今戦争の傷跡に苦しんでいる第一世代、第二世代、第三世代がいること、

その痛みから、今私たちは目を背けてはいけない」。そして、「加害の責任を負う」ということは怖いことではなく、「むしろ、どっしりと今生きている世界、地に足をつけることだと感じた」と言う。

ここで、徐京植（2000）による「日本人としての責任」をめぐる論争の整理を紹介しておきたい。徐は、まず、「靖国派」など右派の国民観を右端に置き（これを「本質主義的国民観」とする）、国民国家論的（非）国民観を左端に置く（これを「構成主義的国民観」とする）横軸を想定する。そして、このような横軸だけでは現在の混乱した責任論を整理することはできないとして、ここに、「日本人としての責任」を認め引き受けるか、それを否認し拒絶するかという縦軸を置く（図参照）。



Dは「靖国派」を代表する右派、極右派であり、「自由主義史観」グループや小林よしのりらが位置づけられ、Cは実用主義的観点から謝罪や補償の必要を限定的に承認する一方でナショナリズムを肯定する「グローバルスタンダード・ナショナリズム」であり、加藤典洋などが位置づけられる。Bは構成主義的立場からの国民国家批判論であるが、国家を相対化することから無責任論に陥る上野千鶴子らに代表される。私たちが目指すのはAである。

ボルカス（2009）は、HWHが目指すゴールのひとつを「文化的・国家的アイデンティティを認識し解体すること」としている。少なからぬ日本人が、「文化的・国家的アイデンティティを認識」していないため、解体する以前に、まず構築しなければならない。国家単位で国際政治が動いている以上、亡命者や難民をのぞいて、自分の属する国家が孕む責任から誰しも免れることはできない。そして、「文化的・国家的アイデンティティ」の認識と解体の訓練ができておらず、無意識のままに留まっているならば、何かを引き金に強烈なナショ

ナリズムが表れても不思議はない。今回のワークショップでは、二つの椅子によってアイデンティティの認識が、一人ひとりの声に耳を傾けることで解体が繰り返し起こっていた。

10月に精神分析家ミヒャエル・エルマン氏による「戦争の子ども時代を思い出すドイツ人」の講演を聞く機会があったが、彼の講演は、「日本において、ドイツ語、すなわちゲーテ、カント、フロイト、アインシュタインやブランクの言語で話すことが出来るのは、私にとって格別に光栄なことであります。しかし、ドイツ語はまた20世紀最大の政治的犯罪者であったヒトラー、ゲッペルスやヒムラーが使用した言語であったことをも、恥じらいと共に付け加えねばなりません」と始められた。このように自分の講演を始める日本人がいるだろうかと思った。エルマン氏自身は（現）ポーランドに生まれたドイツ人としてドイツ軍から迫害を受けた経験を持ち、ドイツ人やドイツ国民としてでなく、「ドイツ語を話す人」という括りで自らのアイデンティティを規定したことも興味深かった。

## 8. おわりに

不十分ではあるが、今回のセミナーを振り返ってみた。今後に向けてさまざまな課題が見えてくる。いまだに解決できていない一番大きな問題は、私たちの取り組みを何だと定義するのかということである。今回のセミナーのタイトルは、「南京を想い起こす2011～戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性をさぐる」とかりそめに置いている。これは平和教育なのかサイコセラピーなのか。ここで目指されているものは、歴史、教育、心理、芸術など、学範を越えた取り組みであり、まだ名前を持たない。

2009年、通訳の問題と誰がファシリテーションするのかという課題が提示された。通訳の問題に関しては、適宜、同時通訳を取り入れることで、ずいぶん改善したと思う。ファシリテーションに関しても、ボルカス氏をリーダーにしながら、プレイバック者たちの協力も得て、できる限り中日の協働で進行できるように工夫がなされた。第三者の立場にあるボルカス氏の存在の意味は大きい。この手法を今後、継続したり広めたりするためには、ファシリテーターの養成が不可欠になってくる。

2012年4月、関係者が京都に集まり、これからの課題を整理し、今後の方向性を見出すために国際シンポジウムを開催して検討する予定になっている。このセミナーが国境を越えた協働のなかで実現してきたように、今後の研究や平和のための活動も国境を越えたつながりのなかで実現していけたらと願っている。

徐京植（2000）『『日本人としての責任』再考～考え抜かれた意図的怠慢』『加害の精神構造と戦争責任』緑風出版

村本邦子（2004）「戦争とトラウマ～語り継ぎと歴史の形成」『女性ライフサイクル研究 14号』

村本邦子（2008）「家族を通じて受け継ぐもの～戦争とトラウマ」『女性ライフサイクル研究 18号』

村本邦子（2009）「こころとからだで歴史を考える～“HWH: Healing the Wounds of History（歴史の傷を癒す）”を通じて～」『女性ライフサイクル研究 19号』

村本邦子（2010）「戦争加害によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』

[http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open\\_research19.html](http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)

ボルカス, A. (2009) 私的会話から

ボルカス, A. (2010) 「南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』